

ORリテラシーで何を教えるか

文科系学生のためのテキスト試案

ORリテラシー研究部会報告

01300300 静岡大学 高井英造 TAKAI Eizo

1 検討の概要

ORリテラシー研究部会では先に、ORリテラシーの概念と基本的な問題意識について報告を行った。

今回の報告では、部会において検討された文科系学生を主たる対象とするORリテラシー教育のためのテキストの素案について報告する。多くの会員から必要性を指摘されているこのようなテキストを具体化することと同時に、テキストの内容を検討することによって、ORリテラシーに含まれるべき要素をより鮮明にすることも目的としたいと考えている。何をもってリテラシーと考えるかについては、部会の中にも様々な見解があり、この発表を機会に、幅広い会員諸氏からのご意見を頂きたい。

2 基本的な構想

(1) 目標：

文科系の情報専攻でない学部学生（経済、経営、政策等）に対してORの基本的な概念と、数理的・システムの的に問題を解析し計画する方法を理解させることによって、構造的な世界観の把握を助け、さらに将来のOR利用につなげる。

(2) 基本的な内容：

基本的な姿勢としては、考え方や、ものの見方を身に付けることに重点をおきたい。モデルを通して現実を理解することに主題をおく。現実の企業経営意思決定や計画における数理的な見方の有用性、問題における条件要因と操作可能要因とを区分、数理実験の意味等も理解させたいが、技法、技術の学習はそのための過程としてとらえたい。そのため、使用する技法を思い切って絞り込み、単純であっても現実との接点を意識した問題をあつかうことを軸として展開したい。常に具体的なイメージを意識しつつ問題を考えるために、学習者に現実の状況についての質問を繰り返しつつ進めるような内容にしたい。

(3) テキストの構成：

- ・テキストの展開順序：データと解析—対象システムとモデル・解法—問題発見法
モデルの概念は具体的な問題を取り上げることで理解させる。ORストーリーとは逆に問題発見を最後に持ってきて、企業における決定問題についての程度の感覚を得た上で考えさせる。
- ・例題と演習テーマ：一つの仮想的な企業の例にそって展開する。
企業としては文系学生になじみやすい流通業（卸、小売）とする。
- ・テキストの構造：解説—事例とデータ—演習
各章の演習に必要なデータと簡易ソフトを入れたフロッピーディスクを添付する。
基本的には、マイクロソフト・オフィス等のパッケージの使用を前提とする。
- ・階層的な構成：事例問題の難易度、技法の理論的説明、技法の種類については2—3のレベルに分けて、授業内容のレベル（受講者の基礎能力）や時間的制約（1年/半年）に応じて幾つもの組み合わせが可能なように階層的な構成をとる。
- ・基本データベースの構成：比較的単純なカテゴリー構成の商品データ（品種、数量、価格等）と顧客別データ（地域、配送方法、支払い方法等）をベースに、注文伝票の具体的データ（発注者、購買商品、購買量、購買時期等）で作成する。